ポール・ヅムトール教授(1915-1995)

原　野　　昇

フランス中世文学の分野でユニークな活躍をしておられたポール・ヅムトール Paul ZUMTHOR 教授が去る1995年 1月11日，カナダのモントリオールにおいて80歳の生涯を終えられた。同教授には，1979年に来日された際広島においでいただき，スイス出身の作家シャルル・フェルディナン・ラミュについて，6月16日，広島大学文学部会議室において講演していただいた。

同教授は1915年3月5日にスイスのジュネーヴで生まれ，ジュネーヴ大学で，『フランス語の進化と構造』*Evolution et structure de la langue française*，『言語学の問題と方法』*Einfürung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft*のほか，記念碑的労作『フランス語語源辞書』*Französisches Etymologisches Wörterbuch* の著者として有名なヴァルター・フォン・ヴァルトブルク Walter von WARTBURGの薫陶を受け，次いでパリに出て中世文学者ギュスターヴ・コエン　Gustave COHENに師事された。オランダのアムステルダム大学で20年以上教鞭をとった後，カナダのモントリオール大学に移り，1968年にはパリのヴァンセンヌ大学に移られた。

著作としては，*Histoire littéraire de la France médiévale* (VIe - XIVe siècles) (PUF, 1954), *Langue et techniques poétiques à l'époque romane* (XIe-XIIIe siècles) (Klincksieck, 1963) をはじめ，*Essai de poétique médiévale* (Seuil, 1972), *Langue, texte, énigme* (Seuil, 1975), *Le masque et la lumière* (Seuil, 1978), *Parler au Moyen Age* (Seuil, 1980), *Introduction à la poésie orale* (Seuil, 1983), *Présence de la voix* (Seuil, 1983), *La poésie et la voix dans la civilisation médiévale* (PUF, 1984), *La lettre et la voix* (Seuil, 1987), *La mesure du monde* (Seuil, 1994)と次々に重要な著作を発表し，学界に大きな刺激を与え続けてこられた。常に口誦詩，口誦文学の側面を重要視した立場であった。

また1970年代末には Union générale d'édition の10/18叢書の中に「中世文庫」Bibliothèque médiévaleを創設し，その編集責任者として，数々のフランス中世の名作や，それほど世に知られていなかった作品を，入手

しやすい簡便本として提供してこられた。

1979年に日本のフランス中世文学研究者がヅムトール教授を日本に招聘したのも，同教授のそのような活躍ぶりからであった。しかし同氏の活躍はそれだけに留まらない。同氏は研究のかたわら，小説家としても *Les Hautes Eaux : le puits de Babel* (Gallimard, 1969)のほかいくつかの作品を発表されている。また来日に際しての講演題目候補には «Un grand romancier suisse de la première moitié du XXe siècle : Charles-Ferdinand Ramuz» というのがあった。かねてからラミュに興味を抱かれていた当時の教室主任杉山毅教授は筆者に相談され，筆者はヅムトール教授の東京での中世関係セミネールなどにすでに出席していたので大賛成し，広島大学での講演は上記の題目に決まったのである。オランダの大学で20年余を過ごし，当時カナダの大学で活躍中であったヅムトール教授は，長年祖国を離れて過ごされながらも，自分が生まれ育った国スイスへの愛着は相当なものがあったようであり，ヨーロッパからはるか離れた極東の国日本の一地方都市広島に，祖国の生んだ地方色豊かな，と同時にそこに住む人間の宿命的な孤独を凝視し続けた異色の作家ラミュに興味をもっているフランス文学研究者がいて，講演題目にラミュを選び，自分に日本でラミュについて話す機会を与えてくれたことに，非常に感激され，その講演は自ずと熱のこもったものであった。1946年 9月24日（結果的にラミュ最後の誕生日），Pully という町の駅前の小さなカフェで，一人ぶどう酒のグラスを前にして，寂しそうにテーブルに肘をついて額に手を当てていたラミュを目撃されたときの様子を，仕草を交えながら話されるヅムトール教授の姿は，ラミュへの思い入れの深さを聴衆に痛いほど分からせ，非常に感動深いものであった。

その後杉山教授は，日本におけるフランス語圏スイス Suisse romande の研究誌 *Romandie*, 2号 (1979年) に「ラミュとヅムトール教授」という文を寄稿された。それがフランスの「ラミュ友の会」会長 Jean-Louis PIERRE氏の目にとまり，ぜひフランス語で書いて欲しいとの要請が寄せられたので，1982年には『広島大学文学部紀要』第42号に，Charles-Ferdinand Ramuz vu par un médiéviste d'origine genevoiseと題して，当日の講演の様子とその内容を紹介されている。さらにアルベール・ベガンの『ラミュの忍耐』 Albert BEGUIN, *Patience de Ramuz* (1950)を翻訳し，*Romandie* の4号 (1981年)，15号 (1992年)，16号 (1993年)，17号 (1994年) に掲載されている（あと一回で終了の予定）。実はヅムトール教授がラミュに魅了されていったのも，元はと言えば，氏の上司アルベール・ベガンに触発されてのことであったのである。

ヅムトール教授は講演当日，杉山教授の求めに応じて，仏文研究室に

あった同氏の著書数点に，来広記念の署名を残されており，広島大学フランス語学フランス文学教室にとっても因縁浅からぬものがある。ご冥福を祈る次第である。

（本稿の執筆に際しては，杉山先生のご教示を受けることができ，また特に経歴や著作に関する部分は，1995年1月14日付け *Le Monde* 紙に掲載されている Patrick Kéchichian et Nicolas Weill両氏署名の記事を参考にした。）